

正法眼蔵のサ変動詞

——その用例(十九)(漢字七字・八字)——

田 島 毓 堂

はじめに

前稿正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十八)(漢字五字・六字)——に続いて、七字のもの七種(計八例)、及び八字のもの二十二種(計二十五例)について、同様に用例を挙げ、若干の解説を加えようと思う。その掲げ方等については、前稿に示したとおりである。

一、漢字七字のサ変動詞の用例

(一) 為三世諸佛説法ス(2例・自) 止一《トモ》・体一
《連体法》

コレハ火焰タトヒ為三世諸佛説法ストモイマタ轉法輪

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

ストイハス(行仏二13ウ2 上358-7)

為三世諸佛説法スル火焰又轉大法輪スヤイナヤ(行仏二

13ウ4 上358-9)

「為三世諸佛説法」を訓読して「三世諸佛ノ為ニ説法ス」と読もうと思えば読める。岩波文庫本(以下「岩波本」)には一二点が付いている。そう読ませるつもりか、単に、この句の意味を知らせるためか。道元禪師全集本(以下「全集本」)には何も付いていない。この例では偶々そういう訓読も可能であるが、他の例は必ずしもそうはいかない。本稿では、今までの一連の流れとして、この漢文一句を漢字音で棒読みして「……ス」とサ変動詞として用いているものと考えておく。意味は、勿論「三世諸佛の為

に説法する」ということである。

(2) 一條拄杖兩人舁ス(一例・自) 未一《ズ》

大瀧ノ道取スル一言半句カナラスシモ仰山ト一條拄杖
兩人舁セス、宗ノ稱ヲ立セントキ瀧山宗トイフヘシ、大
瀧宗トイフヘシ、瀧仰宗ト稱スヘキ道理イマタアラス
(仏道九37ウ6 中224-13)

五家の宗称を戒める中で取り上げられた言葉である。特に瀧仰宗というのが妄称であることを言う中で用いられている。自称するなら大瀧宗、瀧山宗と自称すべきであり、仰山を取り込むべき謂われはないというのとを、大瀧は「二條の拄杖を仰山と二人で舁く」のでは決してないというのである。岩波本でも、この例では「二條拄杖兩人舁せず」と一漢語サ変動詞としている。

(3) 一切衆生無仏性ス(一例・自) 体一《連体法》

説心説性ニアラサレハ轉妙法輪スルコトナシ、發心修
行スルコトナシ、大地有情同時成道スルコトナシ、一切
衆生無仏性スルコトナシ、拈花瞬目ハ説心説性ナリ、

……オホヨソ佛佛祖祖ニアラユル功德ハコトゴトクコレ
説心説性ナリ(説心九7ウ9 中205-8)

岩波本は「一切衆生無仏性なることなし」となっている。「秘密正法眼蔵」本も「ナル」であるが、梵清本等はスルである。文の続きからは、スルの方がスムーズである。意味としては、「一切衆生が無仏性である」の意であるが、サ変動詞が自動詞化するときにはしばしば「デアル」の意で用いられる。その一例と考えておく。この「一切衆生無仏性スル」こともこの引用文にあるとおり、「佛佛祖祖の功德」であり、「説心説性」なのだということである。この引用文中の「アラユル」は連体詞アラユルの発生するときの様子を示している。動詞としても機能しているが、同時にそれが「ありとあらゆる」の意味も蔵している。

(4) 一展坐具礼三拜ス(一例・自) 用《テ》

拜ハ九拜アルイハ十二拜スルナリ、拜シオハリテ取坐
具シテ問訊ス、アルイハ一転坐具礼三拜シテ寒喧ヲノフ
ルコトモアリ(陀羅尼1030オ5 中289-6)

岩波本は「あるいは一展坐具、礼三拝して、寒暄をのぶることもあり」としている（全集本には「坐具」の次の「」はない）。一見合理的に見えるが、日本語の文としてみると、「一展坐具」はどういう役割になるのか、体言格で中止法なのか、並列なのか。それより、これを続けて、「二展坐具礼三拝して」とする方が文としては整うのである。正法眼蔵の語法としてこういうあり方が普通である。意味は特別のことではなく「坐具を一展して、礼を三拝する」の意である。

(5) 願生此娑婆国土ス（一例・自）用《動詞》

誠諦ノ佛語タレカ信解セサラン、コノ經典ニアフタテマツレルハ信解スヘキ機縁ナリ、深信信解スヘキ機縁ナリ、深信信解是法華經深信解壽命長遠ノタメニ願生此娑婆国土シキタレリ、如来ノ神力慈悲力壽命長遠力ヨク心ヲ拈シテ信解セシメ身ヲ拈シテ信解セシメ境界ヲ拈シテ信解セシメ仏祖ヲ拈シテ信解セシメ諸法ヲ拈シテ信解セシメ實相ヲ拈シテ信解セシメ皮肉骨髓ヲ拈シテ信解セ

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

シメ生死去来ヲ拈シテ*信解セシムナリ（見佛十二6ウ 5 中348—8）（*信解せしむるなり）
曹洞教会修証義第五章のはじめに「願生此娑婆国土しきたれり、見釈迦牟尼佛を喜ばざらんや」といつているのは、この辺りの消息を言うのである。「願ってこの娑婆国土に生まれる」という意味を、このようなサ変動詞にしたのである。「アフタテマツレル」は「あひ奉れる」のウ音便化したものである¹⁾。

(6) 道来道去道来去ス（一例・自）《連体法》

南岳山石頭庵無際大師イハク、吾結草庵無寶貝飯了從容図快睡。道来道去道来去スル飯了ハ參飯佛祖意句ナリ、未飯ナルハ未飽參ナリ、シカアルニコノ飯了從容ノ道理ハ飯先ニモ現成ス、飯後ニモ現成ス、飯了ノ屋裏ニ喫飯アリト錯認スル、四五升ノ參学ナリ（家常十二22ウ 7 中372—1）

この「道」は「言う」の意。「日本思想体系」本の頭注に「俗語風に調子をとって言ったもの。ああ言いこう言います、あれこれまくし立てる（入矢）」とあるとおりであ

る。

(7) 劈面来大家相見ス(1例・自)《連体法》

尽十方世界是自己光明。自己トハ父母未生已前ノ鼻孔ナリ、鼻孔アヤマリテ自己ノ手裏ニアルヲ尽十方界トイフ、シカアルニ自己現成シテ現成公案ナリ、開殿見佛ナリ、シカアレトモ眼睛ヲ被別人換却木棹了也、シカレドモ劈面来大家相見スルトヲウヘシ(十方十一 32ウ1 中340-5)(岩波本……相見することを)

懷奘筆本「相見すること」なので、乾坤院本の一字脱落であろう。瑠璃光寺本は「相見スルコトウヘシ」と、この部分本文に何等かの問題があったようだ。このサ変動詞の意味は、「面を引き裂いて(＝まっこうから)みんな顔を合わせる」ということで、文字を辿って言えば、「面を引き破つて、みんなが会う」ということで、この一句をサ変動詞化したもの、正法眼蔵の常套的な語法である。

以上、漢字七字の漢語サ変動詞である。最初の一つ以外、全て単独の用例である。全七例、八回の使用である。

句を一動詞として用いているのが大半である。

二、漢字八字のサ変動詞の用例

(1) 合掌問訊焼香焼湯ス(1例・自)体《連体中止》

僧業トイフハ雲堂裏ノ功夫ナリ、佛殿裏ノ禮拜ナリ、後架裏ノ洗面ナリ、乃至合掌問訊焼香焼湯スル、コレ正業ナリ(分法十二42オ3 下3518)

岩波本、前半の「合掌問訊」と「焼香焼湯」の間が「・」で区切られている。意味的にはそうだが、語法的に見れば、この八字は一まとまりである。二字ずつの積み重ねであるが、それを二字ずつできらず、八字まとめて一まとまりであるところに、正法眼蔵の語法の特徴が見られる。八字サ変同時の場合、四字、六字の場合と似ており、二字ずつの積み重ねが、約半数である。連体中止という用法については、拙著『正法眼蔵の国語学的研究』の第七章第二節「連体形中止」について(二二三―二四二頁)に述べたとおりである。国文法の世界では、この重要な語法を殆ど取り上げていない。

(2) 九上洞山三到投子ス(1例・自)体《連体中止》

雪峰真覺大師義存和尚カツテ發心ヨリコノカタ掛錫ノ叢林オヨヒ行程ノ接待ミチハルカナリトイエトモトコロヨキラハス、日夜ノ坐禪オコヲラスシテ坐禪ト同死ス、咨參ノソノカミハ九上洞山三到投子スル、奇世ノ辨道ナリ(行持上359ウ5 中38-5)

この例も、前例と同じく連体中止の用法である。連体形で終始するのでもなく、体言に係っていく連体法でもなく、一旦そこで文を中止し、次の文に対して、この場合は、「くすること、それは……」というような意味合いで関係していくものである。条件法の働きをする例もある。この例も、広く考えればその一つであるといえるが、これは、次の文の主格の働きと考える方が、素直である。この例においても、岩波本は「九上洞山三到投子する」と訓点、送り仮名などを付けているが、その意味を理解するためのものであり、この全体はこれで漢語サ変動詞の資格である。一文全体を漢語サ変動詞の語幹としているのである。正法眼蔵に特徴的な用法である。

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

(3) 供養恭敬尊重讚歎ス(1例・他)止《ベシ》

一切ノ華香瓔珞幡蓋伎樂歌頌ヲモテ供養恭敬尊重讚歎スヘシ(如来全身十三17ウ3 下9-12)

供養ス、恭敬ス、尊重ス、讚歎スを重ねて一つにしたサ変動詞、特に、目的語は示されていないが、何かをそうすることを含意するので、他動詞としておく。

(4) 供養恭敬禮拜奉觀ス(1例・他)用《タテマツル》

迦葉尊者シタク世尊ノ面授ヲ面授セリ、心授セリ、身授セリ、眼授セリ、釈迦牟尼佛ヲ供養恭敬禮拜奉觀シキタテマツレリ(面授十一3オ3 中312-5)〔乾坤院本は、「奉勤」、「キ」の右に「タ」、「キ」に消去の印はないが「シタテマツレリ」のつもりだろう〕

前の例と同じで、供養ス、恭敬ス、禮拜ス、奉觀スを連ねて一漢語サ変動詞化したものである。

(5) 見尽十方界沙門身ス(1例・自)体《ナリ》

雖然如是天上天下唯我独尊コレ沙門全身ナル十方尽界ナリ、頂寧眼睛鼻孔皮肉骨髓ノ箇々ミナ透脱尽十方ノ沙

門身ナリ、尽十方ヲ動著セス、カクノコトクナリ、擬議量ヲマタス、尽十方界沙門身ヲ拈来シテ見尽十方界沙門身スルナリ(十方十一32オ7 中340—1)〔乾坤院本「尽十方界沙門身ヲ拈来シテ見」脱。懷奘筆本により補う、この脱落、全集本も、岩波文庫本も指摘せず。正法寺本・龍門寺本にはあり、乾坤院本独自のので、見過ごされたか〕

この「見」は現すの意、「見尽」で「現し尽くす」の意になる。「尽」は「尽十方界沙門身」の「尽」でもあり、「見尽」の「尽」でもある。この一句をサ変動詞化したものである。

(6) 言談祇對運用施為ス(1例・自)体《連体中止》

文字ノ法師タトヒ法性ノ言アリトモ馬祖道ノ法性ニハアラス、不出法性ノ衆生サラニ法性ニアラサラント擬スルチカラタトヒ得処アリトモアラタニコレ法性ノ三四枚ナリ、法性ニアラサラント言談祇對運用施為スル、コレ法性ナルヘキナリ(法性126オ7 中283—9)

この連体中止の用法は、次に「コレ」で受け止められて

いる。これも、言談ス、祇對ス、運用ス、施為スの四つの二字漢語サ変動詞を続けたものである。

(7) 三世諸佛立地聽法ス(1例・自)止《終止》

火焰ノ三世諸佛ノタメニ説法ノトキ三世諸佛立地聽法ストハシレリトイヘトモ火焰轉法輪ノトコロニ火焰立地聽法ストシラス、火焰轉法輪ノトコロニ火焰同轉法輪ストイハス、三世諸佛ノ聽法ハ諸佛ノ法ナリ、他ヨリカウフラシムルニアラス、火焰ヲ法ト認スルコトナカレ(行仏213ウ8 上358—12)

「立地聽法ス」という四字漢語サ変動詞が四例ある。⁽²⁾「立地」は「聽法ス」を修飾する語句だった。この「三世諸佛立地聽法ス」はそれにさらに、その主語である「三世諸佛」までが一緒になっている。この引用文中にある「火焰立地聽法ス」「火焰同轉法輪ス」と同様、この一まとまりを漢語サ変としたが、これは、「三世諸佛」「火焰」を切り離すことも可能である。しかし、本稿では、一まとまりの語句を取り上げてそれをサ変動詞化する語法を広く取り上げる方針を貫いた。「聽法ス」の中で「法」が「聽」の目

的語になつてゐるので、語句全体ではもう目的語を取らない。

(8) 受持読誦解説書写ス(1例・他)用《テ》

而今ノ諸法実相ハ経卷ナリ、人間天上海中虚空此土他界ミナコレ實相ナリ、経卷ナリ、舍利ナリ、舍利ヲ受持読誦解説書写シテ開悟スヘシ、コレ或從経卷ナリ(如来全身十三8才9 下10-12)

受持ス、読誦ス、解説ス、書写スの四つの二字漢語サ変を連続して一つにしたものである。この受持・読誦・解説・書写の四語を連用して一語化することは他にもあるが、サ変動詞化しているのはこれだけである。

(9) 心念身儀発露白佛ス(1例・他)止《ベシ》

カクノコトク懺悔スレハカナラス佛祖ノ冥助アルナリ、心念身儀発露白佛スヘシ、発露ノチカラ罪根ヲシテ銷殞セシムルナリ(谿聲五34才5 上145-12)

「心も、身も全て露して仏に白す」ということを一つの漢語サ変動詞化している。曹洞教会修証義第二章、最後の

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

一節にとられた文である。

(10) 随喜歡喜信受奉行ス(1例・他)止《ベシ》

コノ面授アフニアヘル自己ノ面目ヲモ随喜歡喜信受奉行スヘキナリ(面授十一7才7 中317-7)(乾坤院本「歡喜」は「權喜」)

随喜ス、歡喜ス、信受ス、奉行スの四つの二字漢語サ變動詞を連用して一つに纏めてゐる。

(11) 石碓米白夜半伝衣ス(1例・自)体《連体中止》

一花開五葉、結果自然成トハ渾身是己掛渾身ナリ、桃花ヲミテ眼睛ヲ打失シ、翠竹ヲキクニ耳処ヲ不現ナラシムル、拈花ノ而今ナリ、腰雪断臂禮拜得髓スル、花自開ナリ、石碓米白夜半伝衣スル、花己拈ナリ、コレラ世尊手裏ノ命根ナリ(優曇十三14ウ7 中393-15)

「石碓米白夜半伝衣スル」とは、五祖が、六祖の米をつくところにおいて夜半に衣を伝えて伝法した故事を言う。その前の「腰雪断臂禮拜得髓スル」は二祖慧可が初祖達磨の下で入門を許された故事、さらに、「桃花ヲミテ眼睛ヲ

打失シ」は靈雲志勤の、「翠竹ヲキニ耳処ヲ不現ナラシムル」は香嚴智閑の悟道の契機を示す。三例は連体中止である中に、「桃花ヲミテ眼睛ヲ打失シ」だけが連用形であるが、これは連用形中止法で、下の「くナラシムル」と同格になり、「く打失スル」と言うのと同じことである。これは、「中止法」と一般には言うが、言わば「中性的」な用法で、それだけでは、文法的役割は決まらず、それを受ける部分で、その機能が決定されるのである。従って、これもまた機能としては連体中止法と同じことである。

石は六祖が米をつけて白くする石白を指す。夜半に伝衣したことは諸処に説かれている。五祖が夜半に碓房に来て「米白也」と。それに対して「白、未有篩在」と答えた。

そして五祖は「以杖打白三下」し、六祖は「以箕米、三簸入室」したと伝法の有様が、伝光録に記されている。それをこのように表現したものであるが、この通りの文字連結の語句は未見である。

(12) 大地有情同時成道ス(3例・自) 用2《キタル・中止法》体1《連体法》

シルヘシ山色谿聲ニアラサレハ拈花モ開演セス、得髓モ依位セサルヘシ、谿聲山色ノ功德ニヨリテ大地有情同時成道シ見明星悟道スル諸佛モアルナリ(谿聲五28ウ6 上1397)

釈迦牟尼佛は十二月八日の明星出現の時悟道した。その時の言葉が「我與大地有情同時成道」と伝えられている。これをサ変動詞化したのがこの例で、漢字八字サ変動詞としては、唯一、三回用いられている。これも、「大地有情」をこの動詞の主語とすることも可能であるが、寧ろそうすることは不自然であろう。

(13) 剃頭鬚髮出家受戒ス(1例・自) 未《シム》

如来在世モロモロノ外道ステニミツカラカ邪道ヲステ、佛法ニ帰依スルトキカナラスマツ出家ヲコフシナリ、世尊アルイハミツカラ善来比丘トサツケマシマシ、アルイハ諸比丘ニ勅シテ剃頭鬚髮出家受戒セシメマシマスニトモニ出家受戒ノ法タチマチニ具足セシナリ(出家

十五44才10 下125-11)

語法的には、剃頭ス、鬚髮ス、出家ス、受戒スを一まとまりにしたものである。

(14) 佛来佛現祖来祖現ス(1例・自)体《ナリ》

諸佛諸祖ノ受持シ単傳スルハ古鏡ナリ、同見同面ナリ、同像同鑄ナリ、同參同證ス、胡来胡現十萬八千漢来漢現一念万年ナリ、古来古現シ、今来今現シ、佛来佛現祖来祖現スル也(古鏡445才6 上283-5)

古鏡の働きとして、「佛来レバ佛現ジ祖来レバ祖現ズ」をこう表現しただけのことである。その直前の「古来古現シ、今来今現シ」は四字ずつで切つてある。それが、この例では続けてあるだけのことであるが、逆にこういうあり方から見て、四字ずつ、あるいは、二字ずつに切つてないものは続けるべきものだということになる。

(15) 發心修行證大菩提ス(1例・自)体《ナリ》

三世諸佛ハ眼晴ノ轉大法輪說大法輪ヲ立地聽シキタレリ、眼畢竟シテ參究スル堂奥ニハ眼睛裏ニ跳入シテ發心

正法眼藏のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

修行證大菩提スルナリ、コノ眼睛モトヨリコノカタ自己ニアラス、他己ニアラス、モロモロノ罣礙ナキカユヘニカクノコトクノ大事モ罣礙アラサルナリ(眼睛十二18ウ 8 中367-2)〔*印の「眼」は、乾坤院本の衍字か。岩波本、全集本無し。正法寺本・龍門寺本・長円寺本にもない〕

これは、發心ス・修行ス・證大菩提スの三つの部分に分けられる。これを一まとまりにした漢語サ変動詞である。

(16) 發心修行菩提涅槃ス(1例・自)未《ズ》

カクノコトクナルカユヘニ即心是仏不染汚即心是仏ナリ、諸佛不染汚諸佛ナリ、シカアレハスナハチ即心是仏トハ發心修行菩提涅槃ノ諸佛ナリ、イマタ發心修行菩提涅槃セサルハ即心是仏ニアラス、タトヒ一刹那ニ發心修證スルモ即心是仏ナリ、一極微中ニ發心修證スルモ即心是仏ナリ……(即心一41ウ5 上105-3)

發心ス、修證スはサ変動詞として特別のことはない。涅槃スも、何とかサ変動詞として通用するだろうが、「菩提」は余り普通ではない。それでも「菩提」悟りの境地」

に入る、というような意味で用いたのであろう。その直前の「發心修行菩提涅槃」は名詞として用いられていて問題はない。これをそのままサ変動詞化した正法眼蔵の常套的語法である。

(17) 毛吐巨海芥吐巨海ス(一例・自)体《二》

佛神通ニアラサレハ諸佛ノ發心修行菩提涅槃イマタアラサルナリ、イマノ無尽法界海常不變ナル、ミナコレ佛神通ナリ、毛吞巨海ノミ*アラス、毛保任巨海ナリ、毛現巨海ナリ、毛吐巨海ナリ、毛使巨海ナリ、一毛二尽法界ヲ吞却シ吐却スルトキタ、一尽法界カクノコトクナレハサラニ尽法界アルヘカラスト学スルコトナカレ、芥納須彌等モマタカクノコトシ、芥吐須彌オヨヒ芥現法界無尽蔵海ニテモアルナリ、毛吐巨海芥吐巨海スルニ一念ニモ吐却ス、万劫ニモ吐却スルナリ、万劫一念オナシク毛芥ヨリ吐却セルカユエニ毛芥ハサラニナニヨリカ得セル、スナハチコレ神通ナリ(神通八6オ5 上380-5)

〔*に岩波本、全集本「に」あり、正法寺本・龍門寺本にはあり、乾坤院本脱字か〕

毛や芥ほどの小さな物が、巨大な海を呑んだり、吐いたりする、それも、一瞬のうちにもそうするし、永劫にわたってもそうしているという。

この例も、毛吐巨海と芥吐巨海の二つの部分に分けるとが出来る。現にそうしたのがこの引用文の中にも名詞として使われている。しかし、今までの扱いの中では、これを一まとまりとしている。正法眼蔵の特徴的語法である。

(18) 問自問他功夫参究ス(一例・他)止《ベシ》

無情説法カナラスシモ声塵ナルヘカラス、タトヘハ有情ノ説法ソレ声塵ニアラサルカコトクナリ、シハラクイカナルカ有情、イカナルカ無情ト問自問他功夫参究スヘシ、シカレハ無情説法ノ儀イカニアルラント審細ニ留心参学スヘキナリ、愚人オモハクハ樹林ノ鳴条スル、葉花ノ開落スルヲ無情説法ト認スルハ学佛法ノ漢ニアラス(無情十4オ3 中271-1)

問自ス、問他ス、功夫ス、参究スと四つの二字漢語サ変動詞を一まとめにしたものである。この自他について他動詞と分類した。問自・問他の「自」や「他」は英語の間接

目的であるが、日本語で言う目的格には成らない。功夫ス・参究スも他に目的語を予定している語である。なお、サ変動詞に直接関わないが、この引用文中の文について言えば、「愚人オモハクハ」以下は、二文が合体している。「愚人オモハクハ」は「樹林ノ鳴条スル、葉花ノ開落スルヲ無情説法ト認スル」事だが、それは「学佛法ノ漢ニアラス」と別々にいうべきところである。

(19) 腰雪断臂禮拜得髓ス(1例・自)体《連体中止》
この例については、(11)の中で述べた。二祖慧可の初祖に参じたときの消息を言う。

(20) 禮佛誦經燒香坐禪ス(1例・自)止《ベシ》
オホヨソ嚼楊枝洗面コレ古佛ノ正法ナリ、道心辨道ノトモカヲ修證スヘキナリ、アルイハ湯ヲエサルニハ水ヲモチキル旧例ナリ、古法ナリ、湯水スヘテエサラントキハ早晨ヨク拭面シテ香草末香等ヲヌリテノチ禮佛誦經燒香坐禪スヘシ、イマタ洗面セスハモロモロノツトメトモニ無禮ナリ(洗面十46ウ8 中309-5)

正法眼蔵のサ変動詞——その用例(十九)——(田島)

これも、禮佛ス、誦經ス、燒香ス、坐禪スを一まとめにして使っているものである。

(21) 離郷尋師辨道功夫ス(1例・自)体《連体法》

先師ハ十九歳ヨリ離郷尋師辨道功夫スルコト六十五載ニイタリテナホ不退不轉ナリ、帝者ニ親近セス、帝者ニミエズ、丞相ト親厚ナラス、官員ト親厚ナラス、紫衣師号ヲ表辞スルノミニアラズ、一生マダラナル袈裟ヲ搭セ*、ヨノツネニ上堂入室ミナクロキ袈裟椀子ヲモチキル(行持下四24オ3 中64-8)〔乾坤院本*にス脱か、引用文中の濁点は乾坤院本にあるもの〕
道元禪師の師如浄の事跡を述べた中に出てくる語である。これも離郷ス、尋師ス、辨道ス、功夫スの四つの二字漢語サ変動詞を一まとめにしたものである。

(22) 或從知識或從經卷ス(2例・自)用1《テ》体1
《ニ》

コノユヘニ五祖ハ向他道スルニ嶺南人無佛性ト為道スルナリ、見佛聞法ノ最初ニ難得難聞ナレ*ハ衆生無佛性

ナリ、或従知識或従経卷スルニキクコトノヨロコフヘキ
ハ衆生無佛性ナリ、一切衆生無佛性ヲ見聞覚知ニ参飽セ
サルモノハ佛性イマタ見聞覚*知セサルナリ(佛性一六
才10 上323―11)〔レ*は岩波本、全集本「る」、乾坤院
本誤か。覚*は乾坤院本欠〕

「或従知識或従経卷」は割合よく使われる語である。或従
知識ス、或従経卷スも三回ずつ使われている。名詞として
も、八字一緒に、あるいは、四字ずつ使われている例はか
なりある。「あるいは知識に従う」「あるいは経卷に従う」
とは、直接師について、あるいは、経卷を通して仏道を参
学することを言う。

以上、漢字八字のサ変動詞二十二語(二十五回の使用)
について用例を掲げて説明した。七字の場合は、一文にス
を付けてサ変動詞化したものが多かったが、八字の場合
は、二字漢語サ変を重ね用いるものが半数を占めた。

(七字・八字漢語サ変の項終わり、次回、九字以上の漢語サ
変動詞を取り上げ、本稿を終了する予定)

注

- (1) 拙著『正法眼蔵の国語学的研究』一九七七 三七八頁
- (2) 『正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十七) 漢字四字
へ〜ワ』『東海学園 語学・文学・文化』一 二〇〇一
- (3) 『正法眼蔵のサ変動詞——その用例——(十七) 漢字四字
へ〜ワ』『東海学園 語学・文学・文化』一 二〇〇一